

インド密教におけるプラティシュターの構造

森 雅 秀

1. はじめに

インド後期密教を代表する学僧アバヤーカラグプタ Abhayākara Gupta のマンダラ儀軌『ヴァジュラーヴァリー』 *Vajrāvalī* にはプラティシュター (pratiṣṭhā) に関する儀軌が四つある。すなわち「尊格の招請」(devatādhivāsana)「尊像などのプラティシュター」(pratimādipratiṣṭhā)「貯水池などのプラティシュター」(puṣkariṇyādīpra°)「園林などのプラティシュター」(ārāmādypra°)である¹⁾。これらは『ヴァジュラーヴァリー』を構成する50の儀軌の第16番目から第19番目に位置する²⁾。プラティシュターとは神像や仏像などの尊像、あるいは僧院・仏塔などの宗教的な施設が制作されたときに、その最終段階で行われる儀式である³⁾。この小論では、『ヴァジュラーヴァリー』にふくまれるプラティシュターの儀軌、とくにははじめの二儀軌にもとづいて、インド後期密教で行われていたプラティシュターの概要を示すとともに、その全体の構造を明らかにしたい。

2. 儀礼の概要

プラティシュターの儀式の全体に先立ち、マンダラの制作が完了していなければならぬ。作られるマンダラはプラティシュターの対象にしたがって異なる。尊像であればその尊像の部族主 (kuleśa) のマンダラ、もしくは金剛薩埵 (Vajrasattva) か阿闍 (Akṣobhya) が中尊のマンダラ、僧院や仏塔などの建造物の場合は大日 (Vairocana) のマンダラ、経典のプラティシュターを行う場合は無量光 (Amitābha) のマンダラと規定されている。マンダラにはマンダラの尊格を象徴する瓶 (kalaśa) が周囲に配されている。これはプラティシュターの対象にアビシェーカ (abhiṣeka: 灌頂) を行うために後ほど用いられる。

尊格の招請

・尊格の招請ではプラティシュターの対象の尊像などの沐浴が行われる。そのた

(160) インド密教におけるプラティシュターの構造 (森)

め、まず沐浴を行うための特別の場所が、マンダラを作った建物の東の方角に作られる。これは「沐浴のマンダラ」(snānamaṇḍala) あるいは「沐浴の基壇」(snānavedi) とよばれる。沐浴のマンダラの表面には二重蓮華 (viśvapadma) とそれを囲む正方形が描かれる。この正方形には四方にトーラナ (torāṇa) と門もある。場合によっては門は四方すべてではなく、西にのみ描くという規定もある。

沐浴のマンダラが完成すると、プラティシュターの対象となる尊像などをその中央に安置し、その内部に阿闍梨は三昧耶薩埵 (samayasattva) を観想する。プラティシュターの対象が尊像の場合は尊像に表現された尊格自身の三昧耶薩埵を観想する。典籍のプラティシュターの場合は、三昧耶薩埵は無量光の姿をとり、僧院や仏塔などの建造物のプラティシュターを行う場合は大日に変わる。僧院や仏塔などは沐浴のマンダラへの移動が不可能なので、そのままそこで三昧耶薩埵を観想する。尊像でも規模の大きなものは同様である。

阿闍梨はその日の夕方に、プラティシュターの対象にニールージャナ (nirājana) とよばれる儀式を行う⁴⁾。アバヤーカラグプタの説明によればこの儀式はつぎのような内容である。阿闍梨はアムリタクンダリン (Amṛtakunḍalin) のマントラと「フーム」(hūṃ) を七回唱えたケン粒を両手に握り、滅罪のマントラを唱えながら尊像などの前で左まわりに回す。さらに、両手を右まわりに回しながらもう一度同じように唱え、両手のケン粒を南東の方角に投げる。つづいてケン粒のかわりに、水、白樟腦 (dharavitaśāvara)、牛糞をつけたダルバ草などを順に手にし、同じ行為をくりかえす。ただし、南東の方角に投げるのははじめのケン粒のみである。これを終えると阿闍梨は両手で尊像にふれる。そして、マンダラの主尊のマントラを唱えながら尊像の胸に香水を塗り、頭に花輪をつけ、アルガ (argha: 闍伽) を供え、灯明をその前で回し、最後にシャジャラ (śajara) と呼ばれる香を供える。

つづいて五種の甘露とパンチャガヴァヤ (pañcagavya) を尊像などに塗る。五種の甘露とはヨーグルト、牛乳、ギー、蜂蜜、砂糖である。これらは銅の容器に入れられ、ダルバ草の束を用いて塗布される。ただし、布に描いた尊像や典籍などには直接塗ることができないため、鏡にうつして鏡の映像にこれらを塗るよう指示されている。

さまざまなものによる沐浴がこれに続いて行われる。まずはじめに芳香のする清浄な水で沐浴させる。そして、ニヤグロード (nyagrodha) などの五種類の乳木の樹皮をくだいて練ったものを尊像に塗る。さらにごま油 (taila)、ターメリック

(haridrā), 栴檀 (śrikhaṇḍa), 赤栴檀 (raktacandana), サフラン (kunkuma) などの香料がつぎつぎと塗布され、沐浴もくりかえされる。最後にもう一度水による沐浴を行い、やわらかい布で全身をぬぐい、衣裳で飾る。

以上で沐浴が完了し、プラティシュターの対象は沐浴のマンダラから離れ、マンダラのある建造物の方に移動する。尊像のように移動可能な対象はマンダラの北東におかれる。建造物などの移動できない対象はそのままである。阿闍梨は自分の胸の種子の光によって、プラティシュターの対象の智薩埵 (jñānasattva) を引き寄せ、すでにプラティシュターの対象の中には三昧耶薩埵が観想されている。阿闍梨はこれに対応する智薩埵を引き寄せ、三昧耶薩埵の中に挿入し、ひとつのものとし、自在にする。智薩埵を引き寄せるときには、尊格に対する祈願の偈を三度唱える。

プラティシュター

阿闍梨はまずはじめに持金剛 (Vajradhara) あるいは金剛薩埵と合一し、自分の胸の種子の光によって、大日をはじめとする十方の諸如来とローチャナー (Locanā) などの女尊たちを眼前にみちびき、プージャーを行う。そして、プラティシュターの対象である尊像に対して水、宝冠、金剛、鈴、名前、阿闍梨、秘密、般若智、第四の九種類のアビシェーカを行う。

水のアビシェーカではローチャナーなどの女尊たちが、金剛薩埵に指示されて、菩提心を本質とする甘露を白い瓶から尊像にふりかけると観想し、阿闍梨自身もマンダラの周囲におかれた瓶の水を尊像にそそぐ。このとき、色金剛女 (Rūpavajri) などが「吉祥の歌」(maṅgalagita) とよばれる偈頌をその周囲で歌う。宝冠のアビシェーカは五如来によって加持された宝冠を、阿闍梨が尊格の頭につける。尊像がヘルカ系の尊格の場合はかわりに布を結わえる。次の金剛と鈴のアビシェーカもそれぞれ金剛杵と金剛鈴を尊格が持つと観想し、いずれも金剛薩埵が与えたと確信する。名前のアビシェーカも同様に金剛薩埵が尊格に応じた名称を与える。阿闍梨のアビシェーカでは、尊像の尊格が金剛杵と金剛鈴を持った手で智恵の印 (jñānamudrā), すなわち配偶神を抱擁すると観想し、水のアビシェーカと同じ方法で沐浴させる。これによって尊格の額に部族主の姿が生み出される。尊格の所属する部族が明らかではない場合、阿闍梨が金剛薩埵の印をつける。つぎの秘密のアビシェーカから第四のアビシェーカまでは一連の観想によるアビシェーカである。秘密のアビシェーカでは金剛薩埵が配偶神との性的なヨーガを

実践することによって菩提心を生じさせ、これを尊格の口にいれると観想する。つぎの般若智のアビシェーカでは、金剛薩埵の配偶神と尊格自身とが結合し、これによってサハジャの楽をそなえたと観想する。さらに第四のアビシェーカにおいて、大楽からなる空性と慈悲がひとつのものであると尊格自身が念ずる。

アビシェーカにつづいてプージャーが行われる。プージャーの供物は衣、花、香、灯明、食物、塗香、装身具である。それぞれに対応するマントラを唱えながら供える。さらに果実や財産なども供え、最後に鏡を示す。つづいてホーマ (homa: 護摩) を行う指示があるが、これは任意であって省略されてもよいと述べられる。行われるホーマは息災のホーマであるが、施主の意向でその他の修法でもよいとする。さらに、尊格の目を開くために、阿闍梨はバターと蜜とでできた眼薬を作り、銀の碗に入れて、金の匙をもちいて尊像の目の部分に塗る。沐浴のときと同様、経典など直接塗ることのできない場合は鏡にうつして行う。つづいて、牛乳、米、ギー、蜜、砂糖を用いて乳粥 (pāyaśa) を作って尊格に召し上がっていただく。乳粥はホーマを行った場合、ホーマの炉で作る。さらに口そそぎの水 (ācamana), 栴檀 (candana), キンマ (tāmbūla) を供える。

一連のプージャーを終えると、阿闍梨は尊格にながくこの場にとどまるよう請願の偈を唱え、さらにアムリタクンダリンのマントラも唱えつつ、右手にもった金剛杵で尊像にふれる。五仏への帰依の偈を唱えて称讃し、また百字からなるマントラ (百字真言) などを唱えて儀礼に不備があったことをわびる。最後に阿闍梨はバリ (bali) を行い、施主も尊像に対し、右邊 (pradakṣiṇa), プージャー、礼拝を行う。

3. まとめ

インド密教で行われていたプラティシュターとはいかなる儀式であったかを簡単にまとめてみよう。プラティシュターの対象となる尊像などの内部に三昧耶薩埵を観想し、これにニーラージャナとよばれる儀式と沐浴を行う。これは沐浴のマンダラとよばれる特別な基壇の上で行われる。その後、プラティシュターの対象をマンダラの北東に移動させ、智薩埵を招き入れ、三昧耶薩埵と合一させた上で、九種のアビシェーカを順に行う。つづいてさまざまなプージャーが行われ、目がシンボリックに開かれ、乳粥が与えられる。そして、プラティシュターの対象にながくとどまるように祈願する内容の言葉が、阿闍梨によって唱えられる。

『ヴァジュラーヴァリー』のプラティシュターの儀式は、尊格の招請と狭い意

味でのプラティシュターのふたつの儀軌から構成されていた。しかし、ふたつの儀軌はここに述べたようにさらに細かいプロセスから構成されている。これらの構成要素は、尊格の招請ではプラティシュターの対象の浄化、狭義のプラティシュターではその内部に生み出された尊格の聖別という文脈で、それぞれ関連づけられ、組み立てられている。そして、沐浴の場からマンダラの北東への移動が浄化から聖別への移行期に相当し、その直後に置かれる三昧耶薩埵と智薩埵の合一において、準備段階が完了するとともに、聖別を開始する条件が整ったと見ることが出来る。

- 1) サンスクリット・テキストは, Lokesh Chandra による影印版 (1977) 151.7-176.6, チベット訳テキストでは北京版 Vol. 80, 108.3.3-112.4.3がプラティシュターの四儀軌に相当する。
- 2) 『ヴァジュラーヴァリー』の50の儀軌とそこでのプラティシュターの位置づけについては森 (1995a) 参照。これらの四儀軌の詳細内容は森 (1995b) 参照。
- 3) プラティシュターの語義と用例については Gonda (1954) による詳細な研究がある。チベット仏教のプラティシュターの研究を Tucci (1980: 308-316) が行っている。これはパンチェンラマ一世によるプラティシュターの儀軌にもとづいている。ヒンドゥー教におけるプラティシュターは Kane (1974: 889-916) が詳しい。
- 4) 本来、ニーラージャナとは、戦争に出陣する前に王が武器や軍馬などを浄めるために行った儀礼である (Gonda 1966: 70-71)。

参考文献

- Gonda, J. 1966 *Ancient Indian Kingship from the Religious Point of View*. Leiden: E. J. Brill.
- Gonda, J. 1975 Pratiṣṭhā. In *Selected Studies*. Vol. II. Leiden: E. J. Brill, pp. 338-374.
- Kane, P. V. 1974 *History of Dharmasāstra*. Vol. 2 (2 parts). Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute (2nd ed.).
- Lokesh Chandra 1977 *Vajrāvalī*. Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures, Vol. 239. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- 森 雅秀 1995a 「インド後期密教の儀礼文献の構成」『南アジア, 東南アジアにおける宗教, 儀礼, 社会——「正統」, ダルマの波及・形成と変容』(石井 溥編) アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 19-34.
- 森 雅秀 1995b 「インド密教におけるプラティシュター」『高野山大学密教文化研究所紀要』9 (印刷中)。
- Tucci, G. 1980 (1949) *Tibetan Painted Scrolls*. Kyoto: Rinsen.

〈キーワード〉 プラティシュター, 『ヴァジュラーヴァリー』, アバヤーカラグプタ
(高野山大学講師)

印度學佛教學研究 第四十四卷 第二号〔通卷第88号〕
文部省科学研究費補助金（研究成果公開促進費）による出版

平成8年3月20日 印刷
平成8年3月20日 発行

編集兼 日本印度学仏教学会
発行者 発行者 前 田 専 学
東京都文京区本郷3丁目34番3号
印刷者 安 道 与 七

発行者 日本印度学仏教学会
東京都文京区本郷七丁目三番一号
東京大学文学部インド哲学仏教学研究室内
振替口座 00180-2-15512

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

有限会社安道印刷工業社・印刷製本